小野 あずさ

出発地点

一期一会は、今後の自分の運命を大きく左右するかもしれない大事な瞬間です。私が舞台照明に関わるきっかけになった『真実のリア王』という公演の、オランダ人演出家（アーティスト）クリスティアン・バスティアン氏と、その公演の照明をされた、私のお師匠、曽我傑氏との出会いは、今から16年前のことです。その公演は、演劇というよりもインスタレーションに近いものでした。出演者（地元のお爺様とお婆様たち）にセリフというものは一切なく、録音された彼らの思い出を語る声だけが、コラージュのように縫い合わさり、シルクのような布でできた亡霊たち（舞台美術）が、彼らの頭上に吊るされていて、ゆらゆらと風でなびいているという風景です。出演者は亡霊の下で、晩餐会のように、1脚の長テーブルを囲み、静かに、のんびりご飯を食べているという、素朴だけれども、彼らの人生 / 営みが、滲み出てくるような演出でした。まるで、時間の流れが、そこだけ止まったかのような感覚を覚えました。なので、この公演の照明は、時間の経過と奥行きを見せるといった面で、とても難しかったのではないかなと思います。クリスティアン氏と曽我氏の見事なコラボレーションにより、このデリケートな公演は、とても幻想的で美しい作品に仕上がり、妻有国際芸術祭の象徴的な作品として、それ以降も、この公演の写真が何度も使われました。この写真を見ると、私は今でも胸が熱くなります。あの公演が、私と照明との、大切な一期一会でした。

真実のリア王

そして先月、16年ぶりに、クリスティアン氏が瀬戸内国際芸術祭で、『大切な貨物』という新たな公演をするということで、お手伝いをさせていただく貴重な機会をいただきました。今回は、テクニカル（主に照明）のコーディネートと、現場での通訳兼、舞台監督的なことを任せられました。クリエイティブズ（演出家はじめ、照明、音響、映像家）はすべてオランダ人、出演者はオランダ人2人と、日本人2人だったため、舞台の勝手がわかっていて、英語と日本語が話せる舞台監督が必要だったようです。現在の仕事から1週間お休みをいただき、早速、瀬戸内へ飛びました。余談ですが、このお話をいただいたとき、「曽我さんにやっていただいたほうが良いのではないでしょうか?」と私から制作側に煽ったのですが、「曽我さんは名のある照明家 / 音楽家なので、今回の監督は小野さんにお願いしたいです」と言われ、お師匠とクリスティアン氏の再結成は残念ながら実現しませんでした。

大切な貨物

リハ（1からの作り込み）は2日間半のみ、仕込みから本番までは3日弱という、怒涛のスケジュールの中、舞台演出という演出を今までにしたことのないクリスティアン氏と、それについていくのがやっとの出演者たちのフラストレーションは、日に日に頂点に達していきました。今まで舞台照明をやってきた経験を最大限に活かして、彼らをサポートすることが、今回の私の第一の仕事であると感じました。それでも、新しい発見や試行錯誤はたくさんありました。パニックアタックに陥った役者を慰めたり、役者とのコミュニケーションがうまくいかず苛立ちを隠しきれない演出家の補佐、テクニカルチームとの時間と内容のすり合わせ、これらの仕事を通して、舞台監督さんって本当にすごいなと実感しました。

はじめ、照明家はETC Lustr Source 4のレンタルを要求してきましたが、日本ではあまり出回っていないということをはじめて知りました。四国や大阪付近の照明レンタル会社にあたっても、どこももっていないということで、最終的に東京のエンジニア・ライティング様から、MartinのELP-CLをレンタルすることになりました（宅急便にて）。緒方様、その節は誠にありがとうございました‼ ETC Lustr S4に比べ、ELPは若干明るく、シャッター線がバナナ型になりにくくていいね、と照明家は言って喜んでいました。

荒々しく、感情的な公演制作のプロセスの中、初めは、どうなることかと内心とても心配していましたが、やはりみなさんプロです。決めるところは決めてきます。無事に公演も大成功に終わり、ほっと一息しながら、今、ロンドン行きの飛行機の中でこのエッセイを書いています。そして、『舞台作りってこんなドラマがあるからこそ、人間らしさがあるし、生もので面白いのだな』と、16年前の出発地点で感じたあの感覚が、そうまとうのように蘇ってきました。ここまでこれたのも、沢山の方々に支えてきてもらったお陰です。このエッセイも、書き始めて6年が経ちました。実にあっという間です。今まで根気強く読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。この回をもちまして、照明家協会エッセイの執筆を終了させていただくことになりました。エッセイ執筆という貴重な機会と出会いを下さった会長の勝柴様にも、この場をお借りして深くお礼を申し上げます。

この先、どの道に進もうとも、この業界で出会えた素晴らしい方々との繋がりは、大切にしていきたいと思います。そして、皆様の今後のご活躍を、遠くからお祈りしております！どうぞ、皆様よいお年を。